声と人柄

宮城 道雄

あるとき、横須賀から東京に向かう省線に逗子駅から乗ったことがあった。ところがその電車が非常に混んでいて、空いた座席がほとんどなかった。ちょうどそのとき、どこかの地方の青年団の人々が乗っていたが、その中の一人が、私の乗り込んだのを見てか「おい、立て立て。」と言ったら、腰掛けていた人たちが皆立ち上がって、私たちに席を与えてくれた。

もしその場合に、私が目が見えていたら辞退するのであるが、私は盲人なのでせっかくの親切を無にしては悪いと思ったので、腰掛けさせてもらった。

私ははじめその青年団の人たちが、つい近くへでも行くのかと思っていたら、やはり私たちと同様に東京へ行くらしいのである。そして、独り言のように「なあに、我々は立っていたっていいのだ。」と言っていた。それからまた、自分たちが立っている苦痛を紛らわすためか、元気よくお互いに話し合っていた。そうかと思うと、なにか手を丸めて、ラッパのまねを始めだした。

そして、いろいろの節を吹いていたが、それがなかなか上手にやっていた。一節吹いては興じ合って、みんなが元気に笑っていた。私はそれをおもしろく感じた。

私は人の言葉つきで、その人が今日自分に、どういう用向きで来たかということが、あらかじめわかる。

その人がどういう態度をしているかということも、自然に感じられるのである。

ある夏の暑いときであったが、ある人が尺八を合わせに、私のところに来たことがある。その人とは心やすい間柄だったし、ちょうどそのときは誰も居合わせなかったので、その人が上着を脱ぎ、裸になって尺八を吹きだした。私はそれを感じていたけれども黙って合奏をしたのであった。そしていよいよ済んだあとで、私が今日のような暑い日には、裸でやると大変涼しいでしょうなあ、と言ったらその人は驚いて、ほうほうのていで帰ってしまった。その人は別に私をごまかそうと思ってやったのではなく、心やすさからのことだったろうが、私の言ったことが当たったのであった。

とりわけ、声で、いちばん私の感ずることは、バスや円タクに乗った場合である。

声を聞いただけで、今日は運転手が、疲れているなと思ったり、また賃金でも値切られたのか、非常に憤慨した気持ちのままだとか、ちゃんと知ることができる。

電車やバスなどの車掌が、わざわざ発車するのを遅らせても、私たち不自由な者の手を引いて、乗せてくれたりすることがある。こういうふうに、道の途中を歩いていても、その人の声を聞いて、その人の人柄が知られるのであるが、私は心のもちようで、声まで変わってくるものだということを信じている。

そして、非常に感謝の気持ちで仕事をしている人と、疲れのぐあいかなにか、非常に不愉快らしくしている人があるように思うが、その差は少しの心のもちようで、どちらにもなるのであると私は思う。

---

1 【横須賀】神奈川県南東部の地名、または駅名。
1 【省線】かつて日本政府の管轄下にあった鉄道線。
1 【逗子駅】神奈川県南東部にある駅。
2 【青年団】かつて全国各地にあった、若者を中心として活動を行う組織。
7 【つい】距離や時間がいくらも離れていない。
11 【節】音楽のメロディー。
13 【言葉つき】話すときの言い方や調子。
13 【あらかじめ】事が起こる前に。
3 【尺八】竹製の縦笛。
3 【合わせる】ここでは、筆者の箏と合奏すること。
7 【ほうほうのてい】ひどいめに遭って、逃げ出す様子。
10 【円タク】大正時代末期から広まったタクシー。一円均一の料金で市内を走った。

【著者】宮城 道雄（みやぎ みちお）
一八九四（明治二七）年―一九五六（昭和三一）年
箏曲家、作曲家。兵庫県の生まれ。
【著書】『雨の念仏』『新編　春の海　宮城道雄随筆集』など

〈出典『心の調べ』（河出書房新社、二〇〇六年）〉